KESENNUMA PRIDE

持続可能なスローシティへ

Kesennuma is a “Slow City” that creates a sustainable future.

https://pride.kesennuma-kanko.jp/

2022年3月発行／発行元：連続テレビ小説「おかえりモネ」気仙沼プロジェクト委員会 〒988-8501 宮城県気仙沼市八日町1丁目1番1号

豊かな海と山に抱かれた、気仙沼

このまちには、先人たちから受け継がれたスピリットがあります。

リアスの海と緑豊かな山や川の恵みを享受していること

命の源である自然を大切に守ること

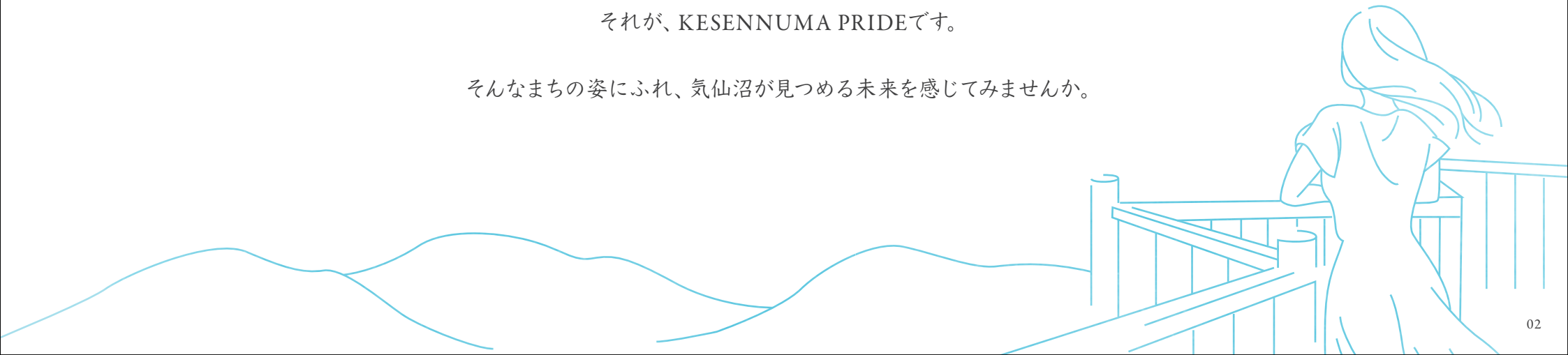
地域ならではの食文化と生活を育むこと

新しいものを受け入れ、多様性を尊重すること

自然を敬い、ともに生きること

これらのスピリットをまちの「誇り」として次代に伝え、
ひとりひとりが心豊かに、自然と共生する。
それが、KESENNUMA PRIDEです。

そんなまちの姿にふれ、気仙沼が見つめる未来を感じてみませんか。



気仙沼の誇りと

Slow City Kesennuma

料理そのものだけでなく、
自然から人の口に運ばれるまでの過程に思いを巡らす。
生活の中で育まれてきた食を次世代に伝え、個性的で魅力あるまちであり続ける。

そんな姿を目指してさまざまな取り組みを行ってきた気仙沼は、
地域の自然環境や伝統文化を守り育むスローなまちとして
世界からも高く評価されています。
持続可能な未来を見つめる気仙沼の人や文化、生業を紹介します。

Slow City Kesennumaへの歩み ―― 05-06
人の心を育てる「森は海の恋人」運動 ―― 07-08
地域と食を支える若手生産者 ―― 09-10
海から生まれた生業と文化 ―― 11-12
自然と人がつくる食文化 ―― 13

未来を伝える

海と生きる

明治、昭和、平成と、幾度となく大きな津波に襲われてきた気仙沼。
それでも人々は、海の可能性を信じ、海とともに生きる暮らしを築いてきました。
人間は自然の一部であることを学び、たゆまない努力でまちを再起させてきたのです。

こうして海は、「過去・現在・未来をつなぐ」存在として、
気仙沼の人々の心のよりどころになっています。
先人たちや今を生きる世代が海とどう向き合い、この先にどのような未来を描いているのか。
そこから、持続可能な世界へのヒントが見つかるかもしれません。
気仙沼の震災伝承のカタチと、SDGsにつながる未来へ向けた取り組みを紹介します。

震災伝承に込める気仙沼の決意 ―― 14
海と生きてきた暮らし ―― 15
環境を守る漁師の取り組み ―― 16
世界につながる「気仙沼ESD」 ―― 17-18
持続可能な漁業が目指すもの ―― 19-20
海と山をつなぐものづくり ―― 21-22
地域の循環を生み出すエネルギー開発 ―― 23-24
海洋プラスチックごみ対策 ―― 25
カーボンニュートラルから持続可能な社会の実現へ ―― 26

食を通じた「つながり直し」で、心豊かに暮らせるスローシティへ

全国屈指の水産都市として、海と共存してきた宮城県気仙沼市。暖流と寒流が交わる好漁場とリアス海岸特有の地形から海と山の恵みを享受し、独自の食文化や生活様式を育んできました。また気仙沼は、2003年に全国で初めて「スローフード都市宣言」を行ったまち。食を核とした持続可能なまちづくりは世界でも高く評価され、2013年には国内初の「スローシティ」に認証されています。この歩みを支えてきた一人が、市民団体「スローフード気仙沼」の理事長・菅原昭彦さん。市内の伝統ある造り酒屋「男山本店」の代表取締役社長としても地域を見つめ続けてきた菅原さんに、スローシティまでの経緯や展望について伺いました。

スローフード気仙沼 理事長
菅原 昭彦 さん

気仙沼の豊かな自然や食を再認識し、まちの誇りへ変えていこう

まちづくりの原点とは何か。そう考えた時に、自分たちの暮らす地域に愛着や誇りを持つことが大切だと思うのです。しかしバブル崩壊後の1990年代、気仙沼は地元に対する自信を失いつつあり、まちづくりの方向性が見えなくなっていました。このまちをどうにかしたいという住民の動きはあるものの、地域の実態とかけ離れた取り組みや一過性のイベントが多かったように思います。気仙沼が持続的な発展を遂げるためには、地域に根ざしたものを磨き、それを誇りに変えることが重要。まずは住んでいる自分たちが、気仙沼の魅力に気づかなければいけないと感じていました。

このように模索している頃、一人の人物と出会います。日本人で初めて国際ソムリエコンクールに入賞を果たした木村克己さんです。木村さんは神戸出身ですが、お祖父さんが気仙沼出身。そのご縁をきっかけに、気仙沼に足を運んでくれるようになりました。そしてある時、われわれに向かって「気仙沼の食材は素晴らしい」と絶賛したのです。「夏にはカツオの刺身が食べられて、秋にはサンマやマツタケがとれて、そうこうしているうちにカキやアワビなども出てくる。年がら年中、しかも同じ食卓に、山と海の恵みが並ぶ場所って、他にないですよ」と。気仙沼の人にとってはあまりにも日常的な食材でしたから、それがこの地域の魅力だと当時は認識していませんでした。そこで木村さんは、こう提案してくれました。「気仙沼の食の素晴らしさを証明するために、超一流のシェフたちを東京から連れてきます。みんなで一緒に、気仙沼の食や自然について考えてみませんか」。

木村さんとの出会いを契機に、2001年には気仙沼商工会議所や青年会議所が中心となって「食のまちづくり協議会」を設立。同年に宮城県から指定を受けた「おいしい地域づくり事業」へと発展します。本事業の一つが、小学校1年生から18歳までを対象にした「プチシェフコンテスト in 気仙沼」です。この料理コンテストは2002年から2021年現在まで毎年行われており、初回からずっとフレンチの巨匠・三國清三シェフが審査委員長を務めてくれています。

さらに地域づくり事業の二つ目として、2002年に「けせんぬま食のまちづくりフォーラム」を開催。そこで料理を作ってくれたのが、イタリア料理の有名シェフ・日高良実さんです。当初は3品ほど用意していただく予定でしたが、イベント前日に気仙沼の自然や食材に触れて刺激を受けた日高さんは、当日に11品も提供。それを食した参加者にアンケートをとってみると、「こんなに素晴らしい食材が、気仙沼にあるとは思わなかった」という声であふれていました。そこでわれわれは、やはり地元の人たちは自分たちのまちの良さに気づいていないのだと実感。しかも「食」というテーマは、誰でも関わりやすいため、地域の人々をつなぐ強力なコミュニケーションツールになると確信したのです。

スローフード都市を宣言し、食を核にしたまちづくりが加速

こうして食を中心とするまちづくりを推進するうち、木村さんのアイデアから「スローフード」というキーワードにたどり着きます。この言葉は、1986年にイタリアで始まったスローフード運動から世界へ浸透していったもの。自然の恵みを享

受しながら地域の食を守り育み、心豊かに暮らしていこうという理念に基づいています。このような精神性は気仙沼でも以前から大事にされており、すでに1986年には「魚食健康都市宣言」を行っていました。そして2003年3月、気仙沼市が国内初となる「スローフード都市宣言」を制定。産学官民が協働し、スローフード運動が広がっていきます。

「スローフード都市」を宣言したからには、住民の意識の醸成も必要です。2003年2月に発足したまちづくり団体「スローフード気仙沼」を運営する私も、スローフード運動の普及・啓発に奔走します。その理念を地元の皆さんに知っていただくため、ある時は小学校や中学校、ある時は老人クラブへ。しかしスローフードという言葉が浸透していなかった当時は、なかなかご理解いただけませんでした。言葉で伝えるのが難しいならば五感で知ってもらおうと、「気仙沼スローフードフェスティバル2007冬」の開催に至ります。

このイベントでは山と海をつなぐことをテーマに据え、内陸部に位置する八瀬地区の旧月立小学校を会場に選定。気仙沼地域のスローフード運動を「見る・聞く・触る・味わう・感じる」のコーナーに分け、五感で楽しめる工夫を凝らしました。

地元の食を味覚や展示で知るだけでなく、生産者や料理人の話を聞いたり、塩辛の漬け方やカツオのさばき方を体験できたり…。また気仙沼には食べ物由来の郷土芸能も多いので、豊作を願う「田植踊（たうえおどり）」、航海の安全を祈る「虎舞（とらまい）」、カツオ一本釣りを表した動きもある「鹿踊（ししおどり）」など、地域に古くから伝わる踊りを目の前で感じてもらいました。真冬の雪深い里山で行われたイベントでしたが、2日間で12,000人が来場。この成功は八瀬地区に活気をもたらし、現在も毎月第3日曜に地域特産のそばを提供する「八瀬・学校そば」につながっています。

山のほうで弾みがついた一方、港に近い中心市街地は元気を失っていました。そこで2010年に開催したのが、商店街の空き店舗も活用した「気仙沼スローフード タウン&ライフフェスティバル2010秋」。ここでは食の発信に加えて、市街地の活性化や豊かな暮らしにつながる企画・演出を取り入れました。2日間で集客20,000人の大盛況を博したことで、商店街の人たちの士気も向上。さらに盛り上げていこうという気運の中、2011年3月11日、東日本大震災に見舞われたのです。

震災を乗り越えて、海とともに生きる“スローシティ”へ

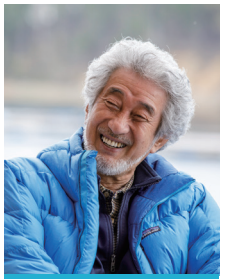
東日本大震災の津波によって、気仙沼は壊滅的な被害を受けました。復旧・復興を急がなければならない状況ですから、まちづくりにおける「スロー」という言葉はいったん封印し、「持続可能な地域づくり」と表現するようになります。それでもなお、震災前まで気仙沼が誇ってきた自然と食材は、この先も誇れるもの。これらを育んできた生産者も、気仙沼の大きな財産です。しばらくはスローフード運動を進めるのは難しいけれど、その精神性はなんとしても継承へ。一日も早く復旧・復興を果たした上で次のステップに進もうと、気仙沼は一丸となります。

まちの再生にまい進するさなか、大きな転機が訪れます。2013年に気仙沼市が日本で初めて、イタリアに本部を置く国際的組織「チッタ・スロー協会」から「スローシティ」の認証を受けたのです。実はさかのぼること2004年、気仙沼市はイタリア・ジェノバで開催された「第1回スローフィッシュフェスティバル」に参加し、気仙沼の漁業について発信。当時世界では日本の漁業に対する誤解や批判が多かったため、実情は地球環境にやさしい漁業だということを訴えました。特に気仙沼は延縄漁業が中心で、マグロ漁も一網打尽にはしません。地元の漁師さんたちに話を聞いても、未来の海のことまで考えた「持続可能な漁業」を貫いています。こうした漁業文化やこれまでのスローフード都市推進事業が評価されたほか、震災復興支援の一環としてスローシティネットワークへの加盟が認められました。

「スローフード」は民間運動、それを取り入れた都市政策が「スローシティ」。どちらも持続発展可能な社会に向かって、軌を一にするものです。またスローフードの理念の中には、「つながり直し」という言葉があります。人と人のつながり、人と自然のつながり、時代のつながり、世代のつながり。これらを大切にするまちづくりを推進できれば、世代を超えて心豊かに暮らせる気仙沼になるはずです。代々受け継がれてきた自然や文化はもちろんのこと、震災を経て生まれた価値観、Uターン・Iターンによる新しい人材など、気仙沼が誇るべきものはたくさんあります。そして2020年には、中心市街地のにぎわい再生を目指す商業観光施設「ないわん」もオープンしました。内湾地区の顔となる本施設が建つのは、防潮堤の上。地元住民が専門家の力を借りながら、自分たちの生活と海を切り離さずに済むような防潮堤を実現したのです。これからも海とともに生きる「スローシティ」として、まちへの愛着と誇りが育つ気仙沼であり続けたいと願っています。

森・里・川・海は、一つのもの。流域全体を見つめ、自然とのつながりを大切に

豊かな山の養分が海に流れ込む気仙沼では、カキやホタテなどの養殖業が発展。地元の漁師たちは養殖技術を磨くと同時に、海産物が育つ自然環境の保全にも努めてきました。その活動を牽引してきたのが、NPO法人「森は海の恋人」の理事長・畠山重篤さんです。気仙沼市唐桑町の舞根湾でカキを育てる重篤さんは1989年、海を守るために植樹活動を開始。水源の山に木を植えることで、流域全体の環境を守り育てる運動を続けてきました。そして現在は息子の信さんとともに、国内外の多くの人たちを巻き込みながら自然保護や環境教育の活動を広げています。こうした「森は海の恋人」の精神や活動は、世界で近年叫ばれるようになったSDGs（持続可能な開発目標）にも通じるもの。時代に先駆けて森・里・川・海のつながりに着目したきっかけや成果、これからも重視すべき自然との向き合い方について、お二人の声をお届けします。



NPO法人
森は海の恋人 理事長
畠山 重篤 さん

NPO法人
森は海の恋人 副理事長
畠山 信 さん

青い海を取り戻すため、漁師たちが山への植樹をスタート

重篤さん／カキ漁師の私が山に木を植え始めたきっかけは、50年以上も前にさかのぼります。その頃の日本は戦後の高度経済成長期にあり、工場の建設やまちの整備など都市開発がどんどん進行。農業のあり方も変化し、化学肥料や農薬が大量に使われるようになりました。こうした人間の都合によって、陸側からの工場排水や生活排水が海へ流れ込み、日本中の沿岸部が赤潮で汚染されてきたわけです。

気仙沼は当時、日本最北のノリの産地として有名でした。気仙沼湾に注ぐ大川の河口には干潟が広がっていて、そこで上質なノリが採れたのです。ところが赤潮の影響で、初めにノリの養殖が困難に。海の仕事から陸の仕事に商売替えすることを漁師言葉で「陸（おか）に上がる」と言いますが、その選択を余儀なくされる人が増えてきました。私がカキを育てる舞根湾にも汚染が近づきますが、海の生き物が根っから好きな自分にとって、海から遠ざかる生活はなかなか思い描けません。「もう一度、海本来の姿を取り戻せないだろうか」。そのために何かできることはないかと、地元の漁師たちと一緒に考えるようになります。

全国のカキ産地を見て回れば、どこも川の水が海に注ぐ汽水域。川から流れてくる水の中に、カキのえさとなる植物性プランクトンの養分が多く含まれていることはわかっていました。「森の恵みが川を通じて運ばれ、海と生き物を豊かにする。森と川と海は一つだ」。そう確信していた私は仲間たちと一緒に、流域全体で対策しようとあらゆる関係先に呼びかけました。しかし、当時の組織は縦割りの考え方が強く、ほとんど取り合ってもらえません。それならば、川の流域に住んでいる人たちの意識から変えようと、大川上流の室根山（現在の岩手県一関市室根町）に木を植えることにしたのです。

“海を守る森づくり”が人々の意識を変え、世界中から注目される舞根湾に

信さん／室根地区（現在の岩手県一関市室根町）の方々に活動への協力をお願いする場で、父・重篤は、何よりも最初に「感謝」を伝えたそうです。「室根の森のおかげで、自分たち漁師が生活できるんだ」と。川の上流に住む人たちは、下流に住む人たちから「川を汚すな」という批判を受けることの方が多かったので、父の言葉に心を動かされたと聞きました。実は舞根地区と室根地区は、地域の伝統行事を通じて1200年以上前から文化的なつながりを持っています。元々交流のある地域だったこともあり、一緒に森づくりに取り組もうという機運が高まっていったのですね。

1989年にスタートし、年に一度行われている植樹祭にはどんどん参加者が増えていきました。国や自治体による環境汚染対策も進み、少しずつ流域全体の環境が良くなってきたわけですが、一番大きな成果といえるのは、人々の意識や考え方が変わったことです。室根地区では、植樹活動への参加をきっかけに、環境保全型農業への転換など自然環境を守る主体的取り組みが広がっていきました。自然を良くするのも悪くするのも、全て人の心持ち次第。自然の重要性やつながりを理解し、どう守っていくかを考えられる人がたくさん育てば、おのずと自然環境は良くなっていきます。我々の活動の真意は「森づくりを通じた人づくり」なのだと、活動を続ける中で気付かされたのです。

重篤さん／たくさんの方が関心を持ってくださったおかげで、「森は海の恋人」の活動は小・中学校の教科書にも取り上げられ、全国で知られるようになります。さらに「森は海の恋人」の理念に通じる新しい学問も起こりました。それが、2004年に京都大学の田中克先生が提唱した「森里海連環学」。森・川・海をトータルで見るだけでなく、人間の生活や生業が存在する「里」の視点からも自然のつながりについて考える学問です。これをきっかけに、私も京都大学から協力を依頼され、学生への講義や舞根湾での実習を行っています。森里海連環学の研究チームは日本に約35,000もある河川の主なるところを調査し、森と海の関係がいかに重要かを数字で証明。こうした動きによって私たちの活動も科学的に認められ、世界中から多くの人が舞根湾へ視察に訪れるようになりました。

自然のつながりを大切にする心と環境を育てれば、未来はひらける

信さん／「森は海の恋人」では植樹活動を始めた当初から、子どもたちの体験学習にも力を入れてきました。環境教育の一助となるよう、カキ養殖の体験や浜辺の生物観察など、自然環境と人の生活のつながりを感じてもらっています。子どものうちに自然と触れ合い、驚きや新しい発見を得ることはとても重要です。

こうした環境で育った僕も、小さい頃から生き物が好きでした。高校卒業後は、自然環境保全について学ぶために東京へ。その後働き始めた屋久島で、生き物のおもしろさや自然の重要性を人に伝える仕事の魅力に気付きます。まさに、“環境教育”の分野です。そこで、父と一緒にカキ養殖と環境事業に取り組もうと地元へ戻り、3年が経った2011年3月、気仙沼は津波に襲われます。甚大な被害を受けた舞根地区ですが、新たな恵みも生まれました。地盤沈下によって塩性湿地が出現し、これまで見られなかった多様な生き物が現れるようになったのです。この湿地や流域全体の自然を守るために、今後もさまざまな取り組みを進めていく予定です。

重篤さん／子どもの頃から海の生き物と一緒に生活してきた私は、いつもカキと話をします。カキは、川から流れてきた水を1日にドラム缶1本分も吸い込むわけですから、カキに聞けば、陸側の人間模様が全部わかるのです。そうやって自然と会話をしながら、森と川と海をできるだけ自然に近いカタチに整えることができれば、SDGsを掲げる世界の未来も見えてくると信じています。気仙沼は今後、日本・世界のモデルになるはずです。私たちの活動は、音楽用語で例えるなら「通奏低音」。集団で演奏する時に低音のベースがしっかりしていれば、高音部の美しさが際立ち、全体がうまくまとまります。「森は海の恋人」という活動によって、世界のベースとなる自然のつながりをたくさんの方に理解してもらえたら、きっと未来はひらけていくでしょう。

若手生産者の地域への想いが気仙沼の食と農をより豊かに

肥沃な大地が広がる気仙沼では、農産物や乳製品の生産が盛んです。代々続く技術や知恵を受け継ぎながら、新しい可能性を切り開く若手生産者もいます。その一人が、気仙沼の気候では難しいショウガ栽培に取り組んでいる農家・齋藤憲介さん。もう一人が、放牧飼育や自給飼料の生産拡大に挑む酪農家・小野寺佑友さんです。この両者のチャレンジは、地域への想いから生まれました。地元で求められる食材の生産や地域資源の活用など、持続可能な食の循環を見つめるお二人の未来へ向けた試みをお伝えします。

農家
齋藤 憲介 さん

酪農家
小野寺 佑友 さん

農家 齋藤 憲介さん

地産地消を進めるため、気仙沼の気候では育ちにくいショウガの栽培を実現

僕と父で営んでいる農園では、キュウリとトマトをメインに生産。手間はかかっても味を第一に考え、昔ながらの栽培方法や品種にこだわって作っています。キュウリを育てているビニールハウスは、僕の1歳の誕生日に家族が設営したもの。トマトのハウスは7歳の時、気仙沼に伝わる民俗行事「羽田のお山がけ」（子どもの成長を祈願する神事）にあわせて建前をしました。こうした節目に張られたハウスを自分たちでメンテナンスしながら、大事に使い続けています。

5代目になる僕が、新たにショウガづくりを始めたのは2012年のこと。本来ならショウガ作りに適さない気仙沼で栽培しようと思ったのは、地域の力になりたかったから。気仙沼では刺身の薬味や水産加工品などにショウガをたくさん使うので、せっかくなら地元産を提供したかったんです。実は一時期、市内の大谷地区でショウガが作られていたことは知っていました。当時、「気仙沼でも作れるのか」と驚いたんですが、そのショウガ栽培も震災で途絶えてしまって…。そこで気仙沼農業改良普及センターから声をかけてもらい、チャレンジすることにしました。

手さぐりで始めた1年目は全くうまくいかず、収穫ゼロ。それなら気仙沼の気候に合わせて栽培方法を変えようと、独自のやり方で試行錯誤を重ねました。普通は種ショウガを直接畑に植えますが、その前に種ショウガを育苗してから畑へ植え替えるようにしたら、次第に大きく育つように。今では収穫量や品質も安定し、日本一の産地・高知のショウガと同じくらいおいしいと言っていただけるようになりました。

地元の水産加工会社からも「齋藤さんのショウガを使いたい」と言っていただき、サンマの甘露煮に使ってもらっています。農業は天気の影響を受けるので大変な仕事ですが、地域の特性に合わせて新しい栽培方法を考えたり、異常気象に備えて野菜を植える場所を変えたり、自然とうまく向き合いながら、日々工夫しています。

うちでは農作物の出荷以外に、市内の種苗店や農協で販売するための野菜苗も栽培しています。この苗作りは、種まきから始めて「接ぎ木」という作業を行います。たとえばキュウリは根っこが弱いため、根っこが強いカボチャを接ぐことで、病害虫に強いキュウリ苗へ。接ぎ木は古くからある園芸技法ですが、長年の経験や労力を要するので、最近では農家でも購入苗を使っているところが多いようです。でも、種から手をかけて育てるからこそ、より強い苗になり、おいしい作物ができると僕は実感しています。また、ちゃんと管理

されて育った新鮮な苗は、家庭菜園でもしっかりと根を張ります。僕たちがつくった苗を通して、地域の方々に「食べ物を育てて食べる」という経験を提供できたら何よりです。気仙沼はスローフード都市を宣言したまちですから、農家としてもできる限り地産地消を目指したいもの。地域の中で求められる食材があれば、生産に協力したいと考えています。

酪農家 小野寺 佑友さん

放牧や地元産飼料で牛を育て、地域が無理なく持続できる循環型酪農へ

気仙沼市の本吉地域は、かつて「乳が流れるまち」と呼ばれるほど酪農が盛んでした。“一家に牛一頭”は普通のことでしたが、次第に牛を飼う家庭が減っていき、今では4軒に。わが家は祖父の代に酪農を始め、今は私が父から受け継いで3代目。約30頭の牛に1頭ずつ名前をつけて、できるだけストレスのないように放牧飼育しています。

現在、地元の観光牧場「モーランド・本吉」で販売している牛乳は、うちの牧場から出荷しているもの。気仙沼産の牛乳とうたうからには、牛の飼料も地元で作ったものにこだわりたいと思い、一般的な外国産の飼料ではなく、自分で刈り取った牧草を発酵させて牛に与えています。将来的には100%地元産の飼料にしたいので、2021年からは耕作放棄されていた畑を新たに借り、飼料用トウモロコシの栽培を拡大。畑の肥料には牛の排泄物を利用し、その畑で育った作物を牛のエサへと、自然資源を生かした循環型酪農を強化しているところです。

また乳牛のほかに、肉牛を1頭育てています。肉牛の飼育を始めたのは、ある銘柄牛との出会いがきっかけでした。高級な霜降り肉を生産する現場を見て、食べるためだけの飼い方に疑問を感じたんです。牧場で自由に動き回り、好きな時に牧草を食べた健康な牛ではだめなのだろうか。そう思って立ち上げたのが、「きたろうプロジェクト」。牛本来の自然な生き方を尊重しながら放牧飼育することで、人間との共存や命のいただき方を見つめ直す活動です。一代目の牛「きたろう」や二代目「ももこ」と地域の人が触れ合う機会をつくり、最終的には食べてもらうことで、みんなで一緒に食の在り方を考えています。食肉生産の実情を知って複雑な気持ちになったり、自分が飼育体験した牛を食べることに抵抗を感じたりする人もいるかもしれません。でも、それも一つの大切な結果。僕自身、「知らないほうが良かった」と思ったことは一つもなかったので、みんなにも知ってほしいなと思うんです。

こんなふうに牛も飼育環境も、なるべく生態系に負荷をかけずに続けられることが理想です。そのためには、気仙沼の地域資源を生かすことも大切。地元で商品にならず残ったものや未利用エネルギーなども活用しながら、地域で無理なく循環できる食づくりを発展させていければと願っています。そのために今、自分が始めようとしているのは「機械を使わない米作り」。現状では農家が大切に作った米が適性価格よりも安く売られているように感じるので、もっと付加価値を高めるために、牛で田んぼを耕そうと思っています。その様子を地域の子どもたちにも見てもらって、気仙沼の自然や食の成り立ちを感じてもらえたらうれしいです。

海から生まれた

漁船漁業、養殖業、水産加工業など、
自然との共生を大切にしながら発展してきた生業は、
これらの醸成を支えたのは、
いつの時代も伝統の中に新しい挑戦や多様性を
その港町の成り立ちや文化、

Contents 01

自然との共存共栄

漁業や漁師文化の発展は、豊かな自然や風土があってこそ。気仙沼に住む人々は遠い昔から、リアス海岸特有の地形、寒暖両流が交わる三陸沖、山と海が隣接する環境など、恵まれた条件を最大限に活用して暮らしてきました。

豊かな漁場

世界三大漁場に数えられる三陸沖は、暖流の黒潮と寒流の親潮が交わる好漁場。マグロやカツオなどの暖流系の魚、サケやサンマなどの寒流系の魚が混在し、気仙沼の漁業に大きな恵みをもたらしてきました。

また、いくつもの湾や岬が入り組んだリアス海岸の地形は、小型船漁業のほか、養殖に絶好の環境を形成しています。外洋の影響を受けない波の静かな内湾は、川の水が海へ注ぐ汽水域。山と海の豊かな栄養を享受し、カキ・ホタテ・ホヤ・ワカメ・コンブなどの養殖が発展しました。気仙沼は世界に先駆けて、養殖業を通じた植樹活動を始めたまち。海を守るための森づくりの取り組みが広がり、森・川・里・海のつながりを大切にする精神が地域に根付いています。

気仙沼の旬カレンダー ～魚介編～

春	よど（イカナゴ）、しらす（イカナゴ、イワシの幼魚、シラウオ）、サクラマス
夏	ホヤ、ウニ、カツオ、マンボウ、もうか（ネズミザメ）
秋	サンマ、イカ、もどりガツオ、イワシ、サバ、サケ、カレイ、タコ、カニ、どんこ（エゾイソアイナメ）
冬	マグロ、カジキ、タラ、ナメタガレイ、アワビ、カキ、ワカメ

Contents 02

漁業の歴史と生業

海と山の恩恵を漁業に生かすためには、技術の向上や時代への対応も必要です。
漁船の動力化がもたらした気仙沼漁港の発展や漁法の進歩についてお伝えします。

水産加工業

気仙沼は、昔から多種多様な種類の水産物が水揚げされており、保存技術や流通体系が整っていなかった時代には長期に保存するために加工する必要がありました。

カツオ節や練り物（竹輪の発祥地とも言われています）の製造から本格的な水産加工が始まり、現在ではフカヒレが有名ですが、サメはヒレだけではなく身肉はすり身の原料に、皮は財布などの皮製品、骨は医薬品や健康食品として全てを余すことなく利用しています。

生業と文化

海を中心とした産業で成り立っている気仙沼。
港町の歴史や独自の文化形成にも結び付いています。
先人たちの英知やたゆまぬ努力。
取り入れながら、さらなる成長を続けてきました。
人と自然の関わりについて紹介します。

漁船漁業の躍進

海と山が非常に近い気仙沼では、古くから木材を利用して舟をつくり、海の魚を獲って生活してきました。その後、造船の技術が躍進したのは明治時代。陸上交通の進歩により、明治の頃まで活躍していた廻船は帆を下ろし、動力化された漁船での遠洋・近海漁業が活発化します。1920年には日本で初めて、本格的な冷凍設備をもつ産地冷蔵庫が建設。それまではサンマなどを塩蔵タルに詰め込んでいましたが、魚や加工品を長く保存して出荷できるようになりました。また他地域から気仙沼に寄港することで、新しい文化や習俗も外来。海からの恵みや異文化を受け入れる地域特性から、多様性が輝くまちへと発展しました。

気仙沼漁港の発展

三陸沖の主要な水揚げを誇る気仙沼漁港は、日本の水産業において重要な役割を担う「特定第3種漁港」に指定。なかでもマグロ船の船籍数は全国屈指で、港に大型漁船がひしめき合うように浮かぶ光景は圧巻です。また漁港周辺には、魚市場や水産加工場、冷凍・冷蔵工場などが集まり、効率のよい流通経路が構築されているほか、製氷施設や燃油施設、造船所なども揃い、漁船のバックアップ体制が整っています。

2019年には、高度衛生管理を可能とした新魚市場が完成。国際的な衛生管理手法「HACCP」、商品の生産や流通過程を追跡できる「トレーサビリティ」にも対応可能な魚市場として、水産業のさらなる発展を目指しています。

Contents 03

港町文化

漁業に支えられてきた気仙沼では、海や風と向き合う生活が営まれてきました。自然の働きを暮らしの中に受け入れ、共に生かし合いながらの生活が育まれています。

「風待ち港」の歴史

気仙沼の内湾は、帆船が漁業の主力だった時代、船出の風を待つ港であり「風待ち（かざまち）」と呼ばれていました。内湾の地形や町並みは北西風が集まりやすいように埋め立てながら整備され、そこに気仙沼の魚市場が置かれていたのです。魚市場が現在地へ移転してからは、気仙沼大島への発着所としての役割を果たし、東日本大震災後には、商業施設「迎（ムカエル）」・公共施設「気仙沼市まち・ひと・しごと交流プラザ（PIRE 7/創（ウマレル））」がオープン。内湾地区はまた新しい形で気仙沼の顔となり、多くの市民や観光客を迎え入れています。

港町ことばや習俗

気仙沼では、北西風のことを「ナライ」、西風を「ニシ」と呼んでいます。ナライはかつて帆船の出港に適した風であったことから、「ダシノカゼ」とも言われていました。ほかにも漁師ことばとして、機械船になる前の和船時代の大漁旗は「オシルシ」、戦後の船の新造を祝う大漁旗は「フライキ」。漁の切り上げ時には船主や網主から漁師に「大漁カンバン」と呼ばれる“はんてん”が贈られ、それを着用して「神様参詣」を行いました。こうした習俗やことばからも、港町文化を見て取れます。

自然と人がつくる食文化

美しいリアスの海、緑豊かな山や川など、恵まれた自然環境と共生し地域ならではの暮らしを形成してきた気仙沼。海からはカツオやサンマ、メカジキなどの魚類、アワビやカキ、ホタテなどの貝類、ワカメやヒジキ、フノリなどの海藻といった新鮮な魚介類が手に入り、里では米や大根、白菜などの野菜、山にはワラビやゼンマイ、マツタケなどの山菜・キノコ類といった大地の恵みが多く実ります。生産者も消費者も自然を敬い、そこからもたらされる四季折々の食材をありがたくいただくことで、気仙沼ならではの豊かな食文化が育まれてきました。

家庭料理から見る食の工夫

あますことなく調理する

魚は生で食べるだけでなく、煮たり焼いたりしてさまざまな料理に使います。
それらの調理法には、魚の骨や頭、内臓の部分まであますことなく食べる習慣や
山の恵みと一緒にいただく工夫が詰まっています。

カツオのあら汁

「あら」とは魚の骨のこと。生鮮カツオ水揚げ日本一の気仙沼では、カツオを3枚におろす際にでる「あら」を味噌または醤油仕立ての汁物にして食べます。カツオはこのほかにも、脂が多い腹の部分を塩焼きにする「ハラス焼き」などさまざまな調理法で食べられています。

鮮度を生かす

気仙沼では、一年を通して鮮度抜群の魚介類が手に入ります。
新鮮な魚は刺身や酢の物など生のまま食べることが主流です。

サンマの刺身・ぬた

新鮮なサンマでしか味わえない刺身は、ショウガ醤油、ニンニク醤油、酢味噌などにつけて食べるのが主流。「ぬた」とは、一般的に酢味噌で和えた料理を指しますが、気仙沼では生のサンマをたたきにし、酢味噌ではなく味噌で和えた料理のことを言います。サンマが旬を迎える秋によく食べられる一品です。

おいしさを長期保存

魚介類は山の食材に比べて長期保存が難しい食材。
だからこそ気仙沼では、先人たちによって海の幸を食料として
長く保存するための貯蔵方法が生み出され、各家庭や地域に根付いてきました。

イカの塩辛

スルメイカを内蔵と一緒に塩漬けにして発酵させた保存食。昔ながらの調理方法ですが、こうじやみりんを入れる場合もあり、家庭によって味も色味もさまざまです。

震災に学び、次世代へつなぐ。海からの教えと恵みをまちの力に

東日本大震災で大津波に見舞われた気仙沼では、災害から身を守るすべや命の大切さを後世に伝えるべく、地域を挙げて防災教育や震災伝承に取り組んでいます。その活動の一つが、市民ボランティアから始まった「語り部」。被災地を案内しながら教訓を語り継ぐ活動が、沿岸部の各地域で行われています。震災前から子どもたちの防災教育に力を入れてきた階上地区でも、地域住民や階上中学校、気仙沼向洋高校など市内の中高生が語り部となり活発に活動。同地区にある「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」で語り部を務めているのが、けせんぬま震災伝承ネットワークの近藤公人さんと階上中学校3年生の三浦雅哉さんです。語り部活動に対する想いをお二人に尋ねることで、海と共存する風土や世代を超えた地域のつながりも見えてきました。

けせんぬま震災伝承ネットワーク 語り部
近藤 公人 さん
階上中学校3年生 語り部
三浦 雅哉 さん

震災の教訓を語り継ぐだけでなく、海と生きる気仙沼の魅力も伝えたい

近藤さん／階上地区で語り部活動に参加しているのは、大人が20数人、中高生は80人ほどおります。この活動のきっかけとなったのは、階上地区の住民有志で作った震災記録誌『服膺（ふくよう）の記』。1000年に一度と言われる災害を後世に広く伝えなければという想いから、記録誌を制作したメンバーの呼びかけで語り部活動が始まりました。2019年3月に「東日本大震災遺構・伝承館」がオープンしてからは、ここの語り部ガイドとして参画しています。

三浦さん／僕のおじいちゃんも近藤さんと一緒に記録誌づくりや語り部活動をしていたので、僕も誘われて参加するようになりました。最初は「中学生に語り部なんてできるのかな」と不安でしたが、今では「中学生だからこそ、できることがある」と感じています。中学生から教えられるのと、大人から教えられるのでは、聞く側の感じ方が全然違うと思うんです。おじいちゃんが「子どもに伝えていくことが伝承の原型であり、一番大切なこと」だと言っていたので、自分も同世代の中高生にどう伝えたらわかりやすいかなと考えながら活動しています。僕が通っている階上中学校では毎年、生徒が防災学習について発表する行事があるので、それも自分が得た知識を人に伝える練習になっています。

近藤さん／語り部の中高生は、自ら進んで地域のことを勉強しているんです。震災のことだけでなく、地域の歴史や産業、名産品など、県外から来た人に何か聞かれてもすぐに答えられるので、感心しています。自分たちの地域を知れば、地域に対する愛着も湧きますから、情操教育にも役に立つのではないかと思っています。

三浦さん／気仙沼は、はるか昔から海と関わってきたまちです。自分はまだ14年間しかここで生活していないので、おじいちゃんや他の大人の方に気仙沼の歴史や海のことを聞くようにしています。東日本大震災の津波で多くのものを奪われましたが、それでも海と生きるまちであり続けようとするのは、それほど海からの恵みが大きかったからだと思います。僕は震災前から気仙沼がすごく好きだったし、何回も海で遊んだ記憶があります。津波でまちの景色は変わったけれど、今もずっと気仙沼が大好きです。だから語り部としても、海から奪われたもの以上に多くのものをもらっていることを伝えていきたいです。

近藤さん／気仙沼の人たちは、海を恨んでいません。海からたくさんの恵みを受けることで、我々の生業は成立しています。震災ではつらいことばかりでなく、人の温かさや絆を感じることができましたし、地域の魅力の再発見にもつながりました。そして三浦くんのように、子どもたちは語り部活動や学校での防災教育によって大きく成長しています。こうして自然や命の大切さを学んだ子どもたちが、未来の気仙沼を創っていってくれるだろうと期待しています。

海と生きてきた暮らし

1952年宮城県生まれ。法政大学社会学部卒業。博士（文学）。東北大学附属図書館、気仙沼市に勤務。宮城教育大学非常勤講師、神奈川大学特任教授、東北大学災害科学国際研究所教授を経て退官。気仙沼市では市史編纂室、図書館。気仙沼・本吉地域広域行政事務組合ではリアス・アーク美術館に勤務し、同副館長を務めた。著書に『海と生きる作法―漁師から学ぶ災害観』『安さんのカツオ漁』『津波のまちに生きて』『魚を狩る民俗―海を生きる技』『追込漁』『カツオ漁』『漁撈伝承』など多数。

民俗学者
川島 秀一 氏

気仙沼の町の形成の歴史は、いわば埋め立ての歴史です。「山海至近」である三陸リアス海岸の地形を「天然の漁港」として生かす一方、人々の生活に適した平野が少なかったことから、湾を埋め立てた人工の港が造られました。また陸とも海ともつかぬ低湿地を埋め立てることで境界線を明確にし、大型の船が停泊できる水深のある港に整備。造船技術が伝えられると、山の森林資源を使ってカツオ一本釣り船のような大型漁船を造ることが可能となり、漁業や他地域との往来が盛んな気仙沼へと発展しました。

この気仙沼市域の埋め立て地は、2011年の東日本大震災の大津波によって浸水。これまでも度重なる津波に見舞われている気仙沼ですが、それでも人々が住み続けてきたのは、海からの「寄り物」、つまり魚を捕りやすい地形だったからと言われています。リアス海岸が形成する汽水域は波が穏やかで、魚が産卵しやすい環境。漁師言葉で“魚寄りが良い”気仙沼湾は、大きな袋網のような役割を果たしたのです。

こうした寄り物を受け入れる精神性は、魚だけでなく、他国の人々やその技術、文化にまで及び、気仙沼の産業や文化の振興をもたらしました。これらの寄り物に対する包容力は、震災からの復興の過程にも同様に言えること。新しい人材の受け入れや他地域との交流が、このまちの躍動力につながっています。

先人から受け継ぐ文化財や海の豊かさを守っていく

リアス海岸特有の起伏に富んだ地形は、気仙沼の海岸線に美しい景観をもたらしています。代表的なスポットの一つが、2011年に国の天然記念物に指定された「九九鳴き浜（くくなきはま）」。乾いた白砂を踏むと「クックッ」と鳴ることから、名付けられたと言われています。この環境を約30年守り続けているのが、漁師OBを中心に結成されている「唐桑海友会」です。会長を務める伊藤 惇さんは、元マグロ漁師。大西洋でプラスチックごみの危険性を目の当たりにした経験から、海を守るための清掃活動や子どもたちの環境教育に携わるようになりました。世代を超えた交流を通じて、地域の自然・文化を守り育てる取り組みをお伝えします。

唐桑海友会 会長
伊藤 惇 さん

美しい海と故郷の景色を守るべく、元漁師たちが清掃活動をスタート

三方を海に囲まれた唐桑半島は、自然環境に恵まれた場所。波の穏やかな内湾ではカキやホタテの養殖が盛んで、荒々しい外洋に船を出せば魚がたくさん獲れます。唐桑で生まれ育った私は、15歳の春から漁師になり、マグロ延縄船で世界の海を巡りました。長い航海を経て帰港する時、船上から唐桑の「九九鳴き浜」が見えてくると、「ああ、無事に帰ってきたな」と安堵したのを覚えています。九九鳴き浜の美しい渚は、唐桑のマグロ漁師にとって故郷を象徴する風景でもあるんです。

この浜の清掃活動を1993年から行っているのが、地元の漁師経験者らが集まる「唐桑海友会」。唐桑半島の西部に位置する九九鳴き浜へ行くには、山道を歩いて森を抜けるか、船で迂回しなくてはいけません。浜で拾い集めたごみは船で運び出す必要があるので、船を動かせる我々が力になれればと思っています。

海のプラスチックごみ削減に向けて、子どもたちの環境学習も支援

唐桑海友会による九九鳴き浜の清掃は、毎年2回。地域の子どもや住民たちと一緒に、船に乗って九九鳴き浜へ渡ります。朝から3時間ほどかけて、浜辺に落ちているごみを清掃。ペットボトルやプラスチック容器、ビンやカンなど、多い時にはごみ袋で約130個分になることもあります。

この清掃活動を始めた理由は、豊かな海や海洋資源を後世に残したいからです。かつて私が漁師だった40～50年前、大西洋で獲れたサメのおなかからプラスチックの容器が出てきたことがありました。プラスチックは自然分解されないので、海にずっと残ります。それをエサと間違って、食べてしまう魚もいます。海や魚を守るためにも、自分たちの身近なところからプラスチックごみを排除しようと、九九鳴き浜を清掃するようになったんです。

そして時代が進むにつれ、国内外で環境保全や持続可能性が叫ばれるようになりました。唐桑海友会でも子どもたちへの教育支援の機会が増え、海洋ごみの危険性や汚染防止のためにできることを伝えています。

海洋教育や世代間交流を通じ、地域の自然や文化を未来へつなぐ

そもそも唐桑海友会は、漁師同士の情報交換や後継者育成を目的として50年前に発足しました。1993年度には会員数最大の180人にのぼったものの、2021年度は51人に減少。以前は漁師経験者のみで構成されていましたが、今は海を守る活動に興味がある方なら漁業未経験でも大歓迎です。

現在の活動は九九鳴き浜や三陸復興国立公園の清掃のほか、唐桑地域内にある唐桑小学校のカキ養殖体験や中井小学校の自然学習のサポート、市内の面瀬小学校や鹿折小学校の漁船見学の受け入れ、さらには「リアス牡蠣まつり唐桑」をはじめとする地域行事のお手伝いなど、自然や文化を次世代につなぐために交流を図っています。

気仙沼のキャッチフレーズにもある通り、「海と生きる」という気持ちはずっと大事にしたいもの。人間が自然を制覇しているのではなく、私たちは自然に生かされているのだと思います。海からいただけるものはありがたくいただき、時に海は怖いものであることも忘れないでほしいです。子どもたちの海洋教育を通じて、自然への畏敬の念も育てていければと考えています。

また震災後には、唐桑地域に若い世代の移住者が増えました。定住を決めた理由を聞けば、「豊かな自然と人情味があるから」と返ってくることが多いです。ここに長く暮らす私たちが知っている自然の素晴らしさ、あるいは地元で語り継がれてきた歴史や地名の由来など、シニア世代から若い世代に伝えられることがあればうれしいですし、若者たちのアイデアや実行力をまちづくりに生かしていくことも重要だと思っています。世代を超えた交流や自然との関わりを大切にしながら、地域全体で未来を育んでいきたいです。

地域を探究し、世界とつながる。“グローカル人材”を育てるまち

持続可能な社会を目指す国際目標「SDGs」が世界に広がる今、その創り手を育む「ESD（持続可能な開発のための教育）」が注目されています。気仙沼には「森は海の恋人運動」や「スローフード運動」などが根差し、早くからESDを土台とした地域ぐるみの教育が推進されてきました。国際的評価も得ている「気仙沼ESD」の特長は、自然環境、食文化、伝統文化、国際理解、防災・減災、海洋など、地域の特色とネットワークを生かした多様な学びを展開していること。地域と学校のつながりを大切にしながら、ローカルへの深い理解とグローバルな広い視野をもった人づくりを目指しています。こうした子どもたちの成長を身近で見つめてきたのが、気仙沼ESD／RCE推進委員会委員長の齋藤益男さんと気仙沼市・宮城教育大学連携センター主任運営員の淺野亮さん。自らも教員として教育現場に長年携わっていたお二人に、気仙沼ESDの歩みを伺いました。

気仙沼ESD／RCE推進委員会委員長
齋藤 益男 さん

気仙沼市・宮城教育大学連携センター主任運営員
淺野 亮 さん

海と生きる環境や地域文化が礎となり、先進的にESDを実践

齋藤さん／宮城県の北東端に位置する気仙沼はかつて「陸の孤島」と呼ばれ、市内に大学がないという課題もありました。このような環境にあっても、地域の教育力向上につながる「森は海の恋人運動」や「スローフード運動」などが市民に浸透。また「世界に開かれた港町」として、国際的視野も養われてきました。こうした特性から、都心部に負けない「地域に根差し地域を生かす教育」を一層進めるべく、教員の指導力向上と子どもたちの生きる力を育むため、市外にある大学との協働を図ることになりました。

淺野さん／こうして教育の質を高めようという気運の中、気仙沼での「ESD（持続可能な開発のための教育）」が始まります。ESDを学校教育の中核に置くきっかけとなったのは2002年、全国に先んじて小学生の英語学習や環境教育に取り組んでいた面瀬小学校が、アメリカ・ウィスコンシン州のリンカーン小学校と共同で国際環境学習を開始したこと。これを機に気仙沼市教育委員会では宮城教育大学との連携を強化し、気仙沼市内の他の学校でもESDを展開しました。たとえば階上小学校はスローフード学習、唐桑小学校は環境学習、月立小学校・旧落合小学校・旧水梨小学校では伝承文化など、各地域の特色や課題を踏まえて協働的に探究学習を行う「気仙沼ESD」を進めてきています。

学校間、地域と学校、産学官民が協働し、探究学習を推進

淺野さん／地域の多様性を尊重した「気仙沼ESD」は、次第に全国的にも国際的にも評価されるようになります。2005年には気仙沼市を含む仙台広域圏が、国連大学の推進する「ESDの地域拠点（RCE）」として世界で最初の7つに認定。さらに、2008年から気仙沼市内のすべての小・中学校、2つの高等学校、2つの幼稚園（当時）が相次いで「ユネスコスクール」に認定され、国内外のユネスコスクールや他地域との交流学習を深めることが可能になりました。

世界へ視野を広げると同時に、気仙沼ESDの出発点である「地域を見つめ、地域をつなぐ」教育にも力を注いできました。市内の学校間、学校と地域、産学官民などを縦横につなぎ、協働的な学びをより促進。気仙沼ならではの海洋教育においても、「海と生きる気仙沼」の水産業や海の生態系、地球温暖化、海洋汚染、防災・減災、伝統文化継承など、地域や大学等との連携による横断的な探究学習を通して、物事への理解を深めています。

齋藤さん／この気仙沼ESDの成果を数値で測るのは難しいですが、子どもたちの意識や行動に着実につながっていることは確かです。たとえば東日本大震災の時には、子どもたちが率先して避難所運営や慰問コンサートなどのお手伝いをしました。そして震災から10年を経た今も、震災伝承の語り部活動に取り組んでいる中高生もいます。（写真①）

浅野さん／私が校長を務めていた鹿折小学校では、当時2年生だった子どもたちが主体的に「小さなユネスコ隊」を結成しました。小学生3人でSDGs達成のポスターをつくることから始まり、開発途上国の子どもたちを支援する活動や被災地支援のための街頭募金を行うなど、上級生や地域の人たちも巻き込みながら活動の輪を広げています。

地球規模の問題を自分のこととして捉え、自分の身近なところから他の人たちと協力して取り組み、自分自身も社会も変えていく。ESDが目指す価値観と人間性が、しっかりと育まれていることがわかる事例だと思います。（写真②）

グローバルな視野を養うと共に、地域のつながりや郷土愛が育つまちへ

齋藤さん／また2017年からは、気仙沼市長も審査員として参加する「気仙沼の高校生MY PROJECT AWARD」が行われています。（写真③）これは高校生が自分のやりたい想いに向き合い、地域について考え、自らが実践するプロジェクトで、すでに実現したアイデアも多数。気仙沼のPRにもつながったまち歩きスマホゲーム「気仙沼クエスト」をはじめ、幼児向けの防災イベントや飲食店の活性化に向けたプロジェクトなど、地域の発展や課題解決を図るアクションがなされています。このような子どもたちの活力ある姿を見ていると、これも課題解決・未来創造型の探究を続けてきた気仙沼ESDの成果の一つではないかと考えています。

浅野さん／さらに2018年に策定された第2次気仙沼市総合計画では、気仙沼が目指す姿として「世界とつながる　豊かなローカル」が掲げられました。この度の新学習指導要領にも、持続可能な社会の創り手を育むことが明確に示されています。こうした未来像を実現できる人材を育てる手立ての一つとして、今まで以上に気仙沼ESDは大きな役割を担っていくことになります。

齋藤さん／これまでの気仙沼ESDを通じて「世界とのつながり」が広がったのはもちろんのこと、地域と学校の結び付きが強くなったことも「豊かなローカル」につながる大きな財産です。地元の方々の手厚い支援や地域に根差した長年の取り組みがあったからこそ、私たちは気仙沼での多様な学びを展開できています。子どもたちには地域への感謝の気持ちを大切にしてほしいですし、自分の夢と志の実現に向けて活躍できる大人に育ってほしい。その生き方をまた次の世代へと、継承していける環境を整えていきたいものです。

水産資源や日本の漁業を次世代へ引き継ぐために

気仙沼の漁業発展を支えてきたのが、伝統漁法でもある遠洋マグロ延縄漁。世界でもマグロ消費大国として知られる日本ですが、近年は漁船漁業の衰退や担い手不足が深刻化しています。この問題に一石を投じるのが、気仙沼に本社を置く漁業会社『臼福本店』の5代目社長・臼井壮太朗さんです。全国鰹鮪近代化促進協議会会長、水産庁お魚かたりべなども務める臼井さんは、日本の漁業課題の解決を目指すとともに、世界の限りある水産資源を守るために漁業の持続可能性を発信。絶滅危惧種に分類されていた大西洋クロマグロ漁では世界で初めて、海のエコラベル「MSC認証※」を取得しました。さらに漁師が働きやすい環境づくり、子どもたちの食育など、水産資源や漁業を次世代へつなぐ挑戦をご紹介します。

※MSC認証とは…MSC（Marine Stewardship Council：海洋管理協議会）の厳格な規格に適合した漁業で獲られた持続可能な水産物にのみ認められる証。通称、「海のエコラベル」。

株式会社臼福本店 代表取締役社長
臼井 壮太朗 さん

日本で衰退が進む漁業を、未来ある成長産業へと変えていく

創業1882年の臼福本店は、気仙沼を拠点とする漁業会社です。現在は遠洋マグロ漁業をメインに、7隻のマグロ延縄漁船「昭福丸」を所有。スペインのカナリア諸島や南アフリカなどに漁船基地を置き、大西洋やインド洋で操業しています。

かつて日本は世界最大の漁業国でしたが、近年は衰退の一途を辿っています。この20年ほどで、日本に600隻近くあった漁船が150隻ほどに減少。私たちが漁獲しているクロマグロの価格も、半値に下落しています。一方、海外ではシーフードの需要が増え、特にヨーロッパでは漁業が成長産業へ。魚食文化がある国の中でも、世界で日本だけ漁獲量が減っているのです。

日本の漁業衰退の原因は、IUU漁業（違法操業や乱獲）による魚の流入や養殖・蓄養漁業の過剰拡大によって、安価の魚が大量に流通していること。安さや手軽さばかりが優先され、厳格なルールを守ってきた日本漁船は淘汰されてしまいました。このままでは、日本の漁業や魚食文化が途絶えてしまう上に、限りある水産資源が枯渇してしまうかもしれない。そんな懸念が日に日に膨らんでいた頃、東日本大震災を経験。そこで食の大切さや人のつながりの尊さを再認識し、他地域にはない気仙沼の漁業や食料産業を誇りに思うようになりました。しかも世界は今、持続可能な社会へと舵を切っています。世の中の価値観が変化しつつある今こそ、食の大切さを広く伝えると共に、日本の漁業を未来ある成長産業へと生まれ変わらせるチャンスだと考えました。

持続可能な漁業を目指し、国際的な海のエコラベル『MSC認証』を取得

まずは持続可能な漁業とIUU漁業の魚を差別化するため、厳正な環境規格をクリアした天然水産物に与えられる「MSC認証」の取得にトライしました。臼福本店の漁船で獲ったクロマグロには、一匹ずつ通し番号入りの電子タグを取り付けています。漁獲した場所の経緯度や日付をデータ化して管理し、洋上から水産庁へ毎日報告。当船に割り当てられた漁獲量の遵守も徹底しています。

こうした取り組みや資源管理への配慮が認められ、2020年8月に大西洋クロマグロ漁世界初となるMSC認証を取得（写真①）。認証までの道のりは長く険しいものでしたが、世界中で持続可能な漁業で獲られた魚のみを使用するホテルや飲食店が増えていることもあり、たくさんの方に私たちの取り

写真：太田拓実

組みを知ってもらえるきっかけとなりました。2021年9月には大西洋クロマグロが絶滅危惧種から外れたというニュースが届き、これまで臼福本店が世界に率先して行ってきた資源管理も改めて国内外で評価されています。

さらに持続可能な漁業に向けて、SDGsの目標8「働きがいも経済成長も」を実行。漁業をより魅力的な産業へ変えるため、震災後に新しいマグロ船を2隻建造しました（写真②）。気仙沼の経済循環にもつながるよう、新船は地元の造船所に依頼。船のデザインに関しては、東京2020オリンピックの聖火台も担当したnendoの佐藤オオキさんと、内装デザインで有名な乃村工藝社の青野恵太さんにお願いしました。漁師さんたちにとって船は動く工場であり、生活する家ですから、乗組員ファーストで暮らしやすい船内環境に（写真③④）。インターネットの高速通信も導入し、遠く離れた家族とのテレビ電話やSNSによる情報発信が可能となりました。乗りたくなる漁船の実現によって、漁業の担い手が増えることを期待しています。

子どもたちに食や漁業の大切さを伝え、地域への誇りや後継者が育つまちに

地元・気仙沼の子どもたちにも食や漁業の大切さを知ってもらえるように、様々な取り組みを行っています。小学校での出張食育授業をはじめ、漁船見学や乗船体験などのイベントも実施。また気仙沼漁業協同組合や気仙沼商工会議所とも協力し、「気仙沼の魚を学校給食に普及させる会」を立ち上げました。本当に新鮮で美味しい魚を食べれば、きっと子どもたちも魚が好きになります。漁師さんの顔が見えれば、食べ物や生産者への感謝の気持ちも生まれるでしょう。そして漁業を身近に感じられるまちになれば、後継者も増えていくはずです。ちょうど先日も、地元のメカジキ漁師さんと一緒に、市内の松岩小学校で出張授業を行いました（写真⑤）。授業の最後に子どもたちから、「気仙沼の漁業を次の世代につなぐために頑張る人たちがいると知って、勉強になった」「身近な人にも広めたい」という感想をもらえて、“ちゃんと伝わっているんだな“と心からうれしく思いました。

これまでの日本は、目先の損得にとらわれ食の安全性や地球環境をないがしろにしてきました。このままでは、未来の子どもたちにその問題を押し付けることになる。だから私は、自分にできることとして、持続可能な漁業にチャレンジしています。気仙沼や日本の漁業を守っていくことは、子どもたちの未来につながり、豊かなまちづくりにもつながるはず。日本・世界を代表する港町として、持続可能な社会への転換を牽引できる気仙沼でありたいと願っています。

木工品を通じて、循環型社会を目指す気仙沼の魅力を全国へ

東日本大震災以降、他地域から気仙沼に移住し、それぞれのスキルを生かした活動を行う若者が多く存在しています。そのひとりが、「RIASWOOD LAB. KESENNUMA」を立ち上げた小柳元樹さん。「海と山をつなぐ木工」をコンセプトに、スローシティに取り組む気仙沼の文化に寄り添った木工品を生み出しています。長崎で生まれ育ち、京都で働いていた小柳さんは、とあるきっかけから気仙沼で東日本大震災のボランティア活動に携わるようになり、このまちに移り住むことを決めました。移住者ならではの視点を生かしながら、ものづくりを通して気仙沼の誇りを発信しようとする思いを聞きました。

RIASWOOD LAB. KESENNUMA代表
小柳 元樹 さん

気仙沼が、仕事のやりがいを教えてくれました

気仙沼に来る前は、京都で建築の仕事をしていました。30歳を目前に、まだ行ったことのない北海道と東北を旅しようと1人旅に出かけ、岩手県の平泉から気仙沼へ向かおうとしていたとき、東日本大震災に遭遇。帰宅難民となりながら、なんとか京都に帰ることができたのは震災の1週間後でした。無事に帰れたのは良かったものの、「気仙沼に行けなかった」という後悔と、京都では周囲の人に震災のことを話してもその衝撃があまり伝わらないギャップにジレンマを抱き続けていました。

改めて気仙沼を訪ねることができたのは、震災から半年が経った頃。知り合いの大学教授から声をかけられ、気仙沼の本吉地域にある仮設住宅の住環境改善を支援するボランティア活動に参加することになったのです。その経験が、私と気仙沼をつなげるきっかけになりました。

活動中は仮設住宅を1軒ずつ回って改善点を調査し、改善作業を行うのですが、“支援活動”というよりも、“お茶っこ”をしている時間の方が長かったかもしれません。ただ一緒に話をすることが、仮設住宅に住む皆さんにとっては喜ばれていたようです。そうした経験を通じて、「誰かに喜んでもらえる仕事がしたい」と感じるようになりました。皆さんに喜んでもらえることが、自分自身の喜びにもつながっていたからです。振り返ってみると、それまでの仕事は何よりも経済優先でした。気仙沼は私にとって、「仕事のやりがい」を教えてくれた大切な場所。これが、気仙沼への移住・定住を決めた大きな理由になりました。

復興には、スピード感が何より大事です。しかしその一方で、もう少しスローなペースでまちづくりや住環境を整えられないかと考えていたのも事実。建築のスキルを持つ私にできることはなんだろう。行き着いたのは、木を使うことで気仙沼のまちや住環境をより良くする仕事ができないかという想いでした。そして生まれたのが、木工品で海と山をつなぐ「RIASWOOD LAB. KESENNUMA」です。

木材とスキルを生かし、“循環する社会”を目指す

RIASWOOD LAB. KESENNUMAで製作しているのは木の器やフォーク、スプーン、まな板、ブローチなどの小物類（写真①）のほか、工房から搬出可能な大きさの木製家具。製作に使用している木の種類はさまざまですが、「地域のつながりの中でものづくりをすることが大切」と考えているので、ちゃんと出どころがわかる地元の木を使うようにしているんです。これは、仮設住宅の支援活動をしていた時に

本吉地域の森林組合の方から提供してもらった木材でウッドデッキを作った経験から意識するようになりました。

気仙沼にたくさんある地域資源の中で「木」に着目したのには、ほかにも理由があります。気仙沼が目指す未来が「循環する社会」だと気付いたからです。支援活動を通して、気仙沼がスローフード運動やスローシティに向けた取り組みを推進していることや、「森は海の恋人」運動に代表されるように海も山も大切にするまちだということを学びました。そんな気仙沼のために私ができるのは、前職のスキルを生かせる木を使って海と山の豊かさをつなげる取り組みだと思ったのです。

木の魅力は「質感」にあると思います。人の生活に馴染む質感です。そうした魅力に加えて、“早くて安くて便利”を求める今の時代に生まれた海洋プラスチックゴミ問題を緩和することができるのも木だと思っています。プラスチックの代用品を木でつくることができれば、気仙沼の豊かな海を守ることができるはず。僕ら世代の木工家はみんな、そうしたことも考えながらものづくりをしています。今後の循環型社会や持続可能な社会にとって、木はとても大切な存在になるはずなんです。

海と山、そしてここに生きる多様な動植物。気仙沼の魅力を木工品で伝えたい

気仙沼は、本当に住みやすいまちですよね。気候もよく、周りの方々が私たちを気にかけて野菜を分けてくれたりする文化もとても素敵。気仙沼の唐桑にある自宅で仲間と一緒にカキを食べながら、そのカキが育った海を眺めているときは本当に幸せだと感じます（写真②）。そうした環境の中で私がつくる木工品を通じて、気仙沼の魅力や豊かな食文化をもっとたくさんの人に知ってもらいたいと強く思っています。

気仙沼はリアス海岸がつくる景観が美しく、海の生物も植物も多彩なまち。そうしたイメージが伝わるような木工品を広く届けたいと製作しているのが、気仙沼の名産品であるサンマやマンボウ、カツオをかたどったブローチ（写真③）。また、私にとって強く気仙沼らしさを感じる、白く美しい木目を持つツバキの木でつくるペーパーナイフです（写真④）。商品の一つひとつに、気仙沼の魅力と誇りを込めていけたらと思っています。

長い時間をかけて築かれてきた気仙沼の文化に見合う木工品をつくることは、私にとってレベルの高い話かもしれません。しかしそれこそが私の目標。新しい社会の在り方に取り組み続ける気仙沼の未来に向かって、少しでも役に立てるよう、これからも頑張っていきたいですね。

エネルギーの地産地消と林業振興を先導するまちへ

持続可能な社会を目指す気仙沼では、東日本大震災の教訓からエネルギーの地産地消を推進しています。震災後の復興計画策定においても、再生可能エネルギーの導入を柱の一つに。気仙沼は面積の約7割が山林であることから、地域資源の間伐材を利用した日本で初めての「木質ガス化バイオマス発熱電」の開発に挑みました。発電事業を立ち上げたのは、気仙沼地域エネルギー開発株式会社の高橋正樹さん。CO2の発生が少ない発電システムを構築・運用すると同時に、地域や日本の林業が抱える課題にも向き合い、森林整備の拡大や若手林業家の育成も進めています。ここでは高橋さんをはじめ、同社で地域おこし協力隊として活躍する鈴木拓樹さんと小石原武志さんにインタビュー。3人の視点から、地域エネルギーと新しい林業の取り組みを見つめます。

気仙沼地域
エネルギー開発株式会社
代表取締役社長
高橋 正樹 さん

地域おこし協力隊員
（気仙沼地域エネルギー開発
株式会社所属、リアスの森応援隊）
鈴木 拓樹さん、小石原 武志さん

気仙沼地域エネルギー開発株式会社
代表取締役社長 高橋正樹さん

木質バイオマス発電の開発によって、エネルギーの地域循環と林業活性化を促進

気仙沼産の間伐材で「木質ガス化バイオマス発熱電」を始めたのは、2011年の東日本大震災がきっかけでした。弊社の母体企業である株式会社気仙沼商会は、漁船の燃料やガソリンなどを扱う事業者。震災翌日から地域への燃料供給に奔走したものの、災害時の深刻な燃料不足を目の当たりにし、エネルギーの安定供給の大切さを思い知らされたのです。

同年6月には気仙沼市震災復興計画も動き出し、私も市民委員として参加。これまでも気仙沼は「森は海の恋人」運動やスローフード運動など、持続可能なまちづくりに取り組んできたとあって、地産地消のエネルギーの必要性が盛り込まれました。こうして、自然環境に負荷をかけない再生可能エネルギーの導入が検討される中、日本ではまだ成功例のなかった小規模な木質ガス化バイオマス発熱電に着目。気仙沼は海のまちのイメージが強いですが、実は面積の約7割が山林です。その間伐整備によって生まれる未利用材を、エネルギー資源として活用できないかと考えました。

そこで気仙沼地区の約2万世帯にアンケートをとったところ、山は持っていても間伐できずにいる人が多いことが判明。山主の高齢化や木材価格低迷の影響を受け、放置された森林が多いこともわかりました。そもそも間伐とは、豊かな森や土壌を育てるために必要なこと。森の養分を育むことは、海の恵みにもつながります。また山の手入れをしなければ、土砂崩れなどの災害を引き起こす恐れもあります。これは気仙沼の課題であると同時に、林業の衰退が進む日本の課題。その解決の糸口を見いだすためにも、地域の間伐材による木質ガス化バイオマス発熱電の事業化と林業活性化のための体制づくりに取り組むことにしたのです。

そして震災翌年の2012年、気仙沼地域エネルギー開発株式会社を設立。ドイツAHT社の発電設備を導入し、2014年には日本初となる木質ガス化バイオマス発熱電プラントが完成しました。

私たちの発電所では、ほかの発電施設の多くが捨てている発電時の「熱」も大切なエネルギーとして地域に供給しています。街中に発電所を建設し、近隣の「サンマリン気仙沼ホテル観洋」と「気仙沼プラザホテル」のご理解を得て、施設内の冷暖房や給湯の熱源として活用していただいています。

間伐材のチップを熱分解して木質ガスをつくり、エンジンを回すことで発電する木質ガス化発電。気仙沼市内の森林面積や間伐によって資源化できる木材の期待量などから、発電量を毎時800kw（平均的な一般家庭1,500世帯分の電気量に相当）に定めました。そのために消費する間伐材は、年間8000トン。この規模であれば、気仙沼の山々を10年に一度間伐すれば十分に燃料材が調達できます。10年後にまた同じ山へ入っても樹木は育っていますので、森の環境を壊すことなく持続することが可能なわけです。

燃料の間伐材は地元森林組合や材木店から仕入れるほか、個人の林業家からも購入。さらに、自分の所有林に入り手入れを行う自伐林業家を育成する研修制度「森のアカデミー」をはじめ、山林を所有していない林業従事希望者と山主を橋渡しする仕組みを作り、森林整備の人手や間伐材の安定確保に努めています。また、間伐材の買取価格の50%を気仙沼の地域通貨「リネリア」で支払うことで、山への対価を里で循環する仕組みも整えました。こうした燃料材の生産からエネルギーの創出・対価の循環まで、持続可能なつながりを育むことによって、地域や環境のため、ひいてはSDGsにも結びつく取り組みを少しずつ広げてきたのです。

自分たちで一から体制をつくるのは本当に大変でしたが、地域の皆さんが「気仙沼をより良いまちにしていこう」という強い思いで協力してくださったおかげで、ここまでの仕組みを構築できたと思っています。特に震災では沿岸部の被害

が甚大でしたから、真っ先に相談した山の方々は「海のまちの復興ために、私たちの出番が来たんだね」と、快く力を貸してくれました。山の木を使って里で発電し、電気を売った対価でまた木を買い、その循環が山・里・海に恵みをもたらす。川上から川下まで一貫した循環型社会の実現に向けて、エネルギーの地産地消を拡大していきたいですし、地域の中に更なる利益を生み出せる事業として発展させていければと考えています。全国に先駆けてスローフード運動や持続発展教育を進めてきた気仙沼だからこそ、世界のSDGsのトップランナーとして持続可能な地域社会を目指し、心豊かな暮らしやつながりを築いていく。これを実現し、この取り組みをほかの地域にも広めていくことが、震災でいただいたたくさんのご支援に対するせめてもの恩返しになると信じて、日々挑戦を続けていきたいです。

地域おこし協力隊員
（気仙沼地域エネルギー開発株式会社所属、リアスの森応援隊）
鈴木拓樹さん、小石原武志さん

環境保全や防災にもつながる間伐。山の手入れの大切さを伝えていきたい

鈴木さん／私たち二人は「地域おこし協力隊」として気仙沼に移住し、現在は出向先の気仙沼地域エネルギー開発株式会社で森林整備に携わっています。主な仕事は、山主さんから依頼された森林施業計画の立案や、間伐、林道整備などです。宮城県利府町出身の私は元々アウトドアが好きで、いつか自然の中で仕事がしたいと思っていましたが、これまで林業に触れる機会がなく、木を伐ることが森林破壊になるのではと誤解していました。正しくはその逆で、適正な間伐が環境保全につながると知り、大きな衝撃を受けました。しかも同じ木や山は一つもないので、毎日新しい発見があり、林業の奥深さを感じています。

小石原さん／私は岩手県北上市出身で、以前は農業生産の会社で働いていました。効率や量を求められる仕事にやりがいを感じられなくなり、転職を決意。木質ガス化バイオマス発熱電という日本でも例のない仕事に携わりたいと思い、気仙沼に移住しました。地元にいた頃から林業に憧れはあったものの、気仙沼に来るまでは全くの未経験。ここでチェーンソーや重機の使い方を教えてもらい、今では自分で木を伐採できるようになりました。森の成長のために生育不良の木を間引き、残した木が立派に育つよう手入れしています。林業は危険な仕事ですが、木を切り倒したときの迫力や達成感は何事にも代えられません。また、自分で伐った木材が地域のエネルギーとして有効活用されている様子を目で見ることができるので、地球規模の仕事をしているんだと誇りに思えます。

鈴木さん／実際に山へ入るようになって感じたのは、手入れされた山が少ないということ。遠くから見ると立派な山でも、近くに行くとモヤシのような細々とした木が多く、枯れ木もたくさん転がっています。整備が行き届いていない山は、密集した枝や葉が太陽の光を遮ってしまい、森の中が真っ暗です。間伐によって地面まで日光が届けば、土壌や木々も豊かに育ち、その恵みは巡り巡って海の栄養にもなります。

小石原さん／間伐などの森林整備は、土砂災害の防止にもつながります。台風や豪雨でも壊れにくい山づくり、災害に強い林道づくりも林業の仕事です。

鈴木さん／このように地域や環境を守る役割も担う林業ですが、人材不足や国産木材の価格低迷などが影響し、日本の林業従事者はピーク時の10分の1に減少。気仙沼だけでなく、日本中に荒れた山林が広がっています。これらの問題解決につながればと、私たちは「リアスの森の応援隊」としても活動中。持続可能な森林整備や林業振興のサポートを行っています。

小石原さん／その取り組みの一つが、「森ワーカー制度」です。山を持っていても伐採する技術がない人、林業に興味はあるけれど経験がない人など、林業希望者に間伐の技術研修を実施しています。研修を終えた人は「森ワーカー」として登録でき、山に入れない山主さんとマッチング。技術力のレベルによって、日当も支給されます。

鈴木さん／登録していただいているワーカーさんは、2021年9月現在で40名ほど。なかには定職を持ちながら週末のみ山林作業するなど、空き時間を活用して林業に関わる人もいます。この制度の導入によって、間伐材の個人搬入量も増加。バイオマス燃料の安定確保も支えてくれています。こうして気仙沼の林業が盛り上がってきている一方で、地域全体に目を向けると、他地域に出て行ってしまう若者が多いのも事実。こんなに魅力ある場所から離れるのはもったいないので、いつか独立して気仙沼に林業の会社を立ち上げ、地元の若い人たちに「ここで働きたい！」と思ってもらえるような受け皿をつくることが夢です。

小石原さん／地域で育った木をエネルギーに変えたり、地産地消のスローフードを実践したり、さらには地元で働けるように雇用を生み出したりと、できるだけ自給自足で賄おうとするのが気仙沼の人たち。そんなふうに無理なく循環できる仕組みや暮らしが、自分には心地よく感じています。最近では気仙沼の猟友会にも参加し、地元の先輩方から気仙沼の自然環境についてたくさんのことを教わっています。これからも人と自然が共存していけるように、私も林業や山の手入れの大切さを伝えていきたいです。

海洋プラスチックごみ対策

プラスチックは利便性に優れる一方、海へ流出してしまうと自然分解が難しく、水産資源や海洋生態系に悪影響を及ぼします。この海洋プラスチックごみへの対策は世界の課題であり、国連の持続可能な開発目標（SDGs）においても、海洋プラスチックごみの防止・削減が掲げられています。

水産業を基幹産業とする気仙沼では、昔から自然環境を守る精神が根付いており、海洋プラスチックごみ問題にもいち早く対応してきました。海洋・陸上でのプラスチックごみの削減や回収・再資源化の徹底、漁具類の海洋流出の防止、さらには使い捨てプラスチックの使用を減らすライフスタイルの変革など、問題解決に向けた「アクションプラン」を産官学民の連携によって実践しています。海と生きるまちとして責任を果たすべく、海洋プラスチックごみゼロを牽引する先進地へ。「自然との共生と持続可能性」を体現し、日本・世界の未来につなげます。

気仙沼市 海洋プラスチックごみ対策 アクションプラン

気仙沼市では2019年9月、プラスチックごみの削減や海洋流出抑制に向けた「アクションプラン」を宣言。プラスチックごみの「3R」を一層推進し、資源循環を徹底することに加え、プラスチック製品を利用する人の意識改革や消費者のライフスタイルを「変えていく」ことを目指し、『3R＋Change』を理念に啓発活動を推進しています。

1 海上でのプラスチックごみの徹底回収

環境省「漁業系廃棄物処理ガイドライン」の周知徹底をはじめ、使用済み漁具等のプラスチックごみが海洋へ流出しないように、漁業者と連携して適正な回収・管理に努めています。また漁港などに「海ごみ回収ステーション」を設置することで、漁港に漂着したごみや海上に浮遊するごみの回収を促進。さらに国指定天然記念物「十八鳴浜（くぐなりはま）」「九九鳴き浜（くくなきはま）」をはじめとする海岸や海水浴場においては、地域住民やボランティア団体が中心となって清掃活動に取り組んでいます。

2 陸上でのプラスチックごみの削減と流出抑制

レジ袋の削減に向けたマイバッグ運動を推進するため、「ホヤぼーやエコバッグプロジェクト」を実施。市民がつないだアイデアをもとに、市内のデザイナーがオリジナルエコバックをデザインし、「62,000人総選挙」と題した市民投票により商品化デザインを決定しました。エコバックは、市内の観光施設などで販売しています。

また、使い捨てプラスチックの削減を目指し、小売店や関係団体等との連携も強化。家庭系リサイクルごみにおいては、分別回収や再資源化を徹底するほか、小売店と協力しながらプラスチックごみの店頭回収を推進しています。

さらに、毎年6月第1日曜を「全市一斉清掃の日」と定め、自治会ごとに清掃を実施。市民の間でも環境美化の意識が高まり、日頃から個人・団体によるボランティア清掃が行われています。

3 意識の啓発と変革

「マイバック運動」の推進に加え、脱ペットボトルに向けたマイボトル利用の呼びかけなど、使い捨てプラスチック容器・包装を減らすライフスタイルへの変革を促しています。また持続可能な社会の担い手を育むために、官民学が連携しながらESD・環境教育を推進。海洋プラスチックごみに関する学習や情報提供のほか、清掃活動や漂着ごみの調査などを通じて、市民全体での理解や取り組みに発展させています。

再生可能エネルギーの促進

東日本大震災をきっかけに、持続可能なエネルギーへの転換を促進してきた気仙沼では、2014年に国内初の小規模「木質ガス化バイオマス発熱電プラント」が稼働開始。2017年には、「気仙沼市民の森風力発電所」の運転も始まりました。

市としても、再生可能エネルギー発電設備の普及を目指し、太陽光発電設備や蓄電池などを設置する一般家庭に補助金を交付しているほか、公共施設における再生可能エネルギー設備の導入、市有地を活用したメガソーラーの建設などを推進。脱炭素化を図るべく、自然の力を利用したエネルギー生産に努めています。

エネルギーの地産地消

地域内で生み出したエネルギーの自家消費を推進するため、気仙沼市は民間企業と共同で地域新電力会社「気仙沼グリーンエナジー株式会社」を設立。2019年から電力供給を開始しました。地域内の再生可能エネルギーにより発電された電力などを同社が購入し、地域内の公共施設や企業、一般家庭などに供給する仕組み。「エネルギーの地産地消」だけでなく、「電気料金の削減」「地域防災力の強化」「地域経済循環の促進」などの複合的な効果が期待されています。

カーボンニュートラルから持続可能な社会の実現へ

今、日本を含む120以上の国と地域が、「2050年カーボンニュートラル」の実現を表明しています。カーボンニュートラルとは、CO2をはじめとする温室効果ガスの排出量と吸収量をプラスマイナスゼロにすること。温室効果ガスの排出を削減すると同時に、CO2を吸収する森や海の植物を守ることで、地球温暖化の緩和を目指しています。

元来、自然との共生によって持続可能性を高めてきた気仙沼では、世界に先駆けてカーボンニュートラルに向けた取り組みを進めてきました。環境への負荷を減らし、自然の恵みである地域資源を大切に守り育み、その価値を市民活動やESDによって次世代へ伝えています。さらに震災後は、再生可能エネルギーの地産地消、公共施設や地域産業の脱炭素化・省エネ化も加速。こうして産業・教育・経済・復興など、分野の垣根を越えた地域全体で脱炭素化を目指すのが、気仙沼のカーボンニュートラルの特長です。

これらのほかにも、持続可能な食の循環を目指す農畜産業や漁業、豊かな自然環境によって育まれた食文化、海と生きる港町ならではの漁業文化、地域資源を活用した新しいものづくりなど、さまざまな活動が地域に広がっています。

気仙沼は今後も、まちの産業や生活、文化を創り支える発展の基礎的な理念として「自然との共生と持続可能性」を掲げ、市民ひとりひとりや地域、企業、行政などが一体となってカーボンニュートラルの取り組みを推進していきます。先人たちから受け継がれてきた気仙沼ならではの“豊かさ”を次世代につなげる、持続可能な社会の構築を目指して。

水産業の脱炭素化・ブルーカーボンの整備

漁業や水産業でも、環境負荷の少ないクリーンエネルギーを導入。魚市場ではフォークリフトをエンジン式から電動式に転換しているほか、LED照明の整備などの脱炭素化を推進しています。

また、地球温暖化の緩和に向けた対策として、海の植物によって大気中のCO2を吸収・貯留する「ブルーカーボン」の働きが期待されていることから、気仙沼では海草藻場の管理などを通じて、海洋性植物などの炭素吸収源を整備しています。

ESD・環境教育

「森は海の恋人」運動やスローフード運動が根付く気仙沼では、国内外に先駆けてESD・環境教育の研究や現場実践を重ねています。持続可能な社会の担い手を育てるため、自然環境や食文化を未来へつなぐ教育プログラムを導入。生産者や企業、住民との連携を図りながら、地域全体で子どもたちの食育や環境保全に取り組んでいます。

また、自然と共生するまちとして防災教育や震災伝承にも力を入れています。